

# 小学校体育に活用可能な基本的動作の観察的評価基準の作成

浅川 孝太（山梨大学大学院）

## 1. 目的

本研究の目的は、小学校低・中学年の「体づくり運動（遊び）」領域の「多様な動きをつくる運動（遊び）」における、基本的動作 3 種類の質的変容を捉えるための観察的評価基準を作成し、小学校現場における基本的動作の観察的な評価方法の有用性を検討することであった。

## 2. 研究方法

研究は、以下の手続きで実施した。

- 1) 解説の例示に示されている動きから「今後取り上げたい動き」について小学校教諭 80 名を対象としたアンケートをもとに基本的動作を選定
- 2) 選定した基本的動作「投動作（正確投げ）」、「捕球動作（正面からのボールキャッチ）」、「スキップ動作」について、山梨県内の小学 1～4 年生の児童 401 名（男子 185 名、女子 216 名）を対象に撮影
- 3) 撮影した動作をモニター画面上で確認し、動作カテゴリーを抽出、動作カテゴリーをもとに未熟な動作パターンから成熟した動作パターンまでの 5 段階の動作発達段階を設定
- 4) 筆者らと 6 名の小学校教諭による動作フォームの評価により、信頼性と客観性を検討

## 3. 結果

投動作・捕球動作・スキップ動作それぞれについて、学年別に出現した動作パターンの割合を図 1～図 3 に示した。

投動作は、低学年では Pattern1、2 が多く出現し、高学年になるにつれて Pattern5 の割合が増加していった。

捕球動作は、低学年では Pattern1、2 が多く出現し、高学年になるにつれて Pattern5 の割合が増加していった。

スキップ動作は、低学年は Pattern1、2 が、中学年は Pattern4、5 の割合が多かった。



図 1 投動作の学年別動作パターンの割合



図 2 捕球動作の学年別動作パターンの割合



図 3 スキップ動作の学年別動作パターンの割合

## 4. 考察

投動作および捕球動作において、年齢が上がるにつれて Pattern1、2 の割合が減少し、Pattern4、5 の割合が増加しており、小学校教諭との単純一致率は 6～7 割程度、ICC は 0.79 を示していたことから、観察的評価基準は小学校現場で活用可能であることが考えられる。

スキップ動作において、低学年よりも中学年の方が Pattern4、5 の割合が多く、小学校教諭との単純一致率は 6 割程度、ICC は 0.65 と良好な値ではなかったことから、小学校現場で活用可能とは言いきれず、小学校教諭にとって評価しにくい動作であったことが考えられる。

## 5. 主な参考文献

- 1) 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領解説 体育編. 東洋館出版社.
- 2) 中村和彦・武長理栄・川路昌寛・川添公仁・篠原俊明・山本敏之・山縣然太朗・宮丸凱史 (2011) 観察的評価法による幼児の基本的動作様式の発達. 発育発達研究, 51 :1-18.